

〔類聚雜要抄^二調度〕立調度例^略○中 其上立帳有纏綯一帖^中敷并表筵^略○中 此中柱二本之内^南上降

一尺六寸打臂金鏡二面各一面懸之枕紐入帷等如鏡臺也

〔室町殿行幸記〕常御所御具足注文

御鏡臺^{まきゑ}に色々入^中

〔永享九年十月二十一日行幸記〕一常之御所

御鏡臺^蒔繪

〔日本歲時記^二正月〕廿日 今日女人の鏡臺の祝として、それに供たりし鏡餅を煮食ふことあり、

〔歷世女裝考^一〕鏡臺に守を掛る、柳の葉、鴛鴦の羽^略○中

雅亮裝束抄^一卷に、鏡臺に守を掛る事見えたり^略○中 されば今より六百餘年のむかし、鏡に守りを

かくるも、かゞみは女の護身物なればなり、鏡匠に、柳の葉をし鳥のつるぎ羽^略○註 なども守

りをかくる心にて、近きむかしの俗習なり、俳諧連山集^略○註 柳の枯葉に残るすがた見^句虫干に

母のうはきをくりかへし、俳諧毛吹草^寛永^迄だの葉を柳にもちひの鏡かな^註宗房^略○俳諧夏の日保

年^廿翌から人に逢ぬ奉公^付 柳の葉は鏡の裏の忘草^{河東}水調子結句に、曇らぬ月の面影は、柳の枯

葉の名ばかりに、鏡の裏に残るらん、なぎはかゞみにのこるらん^略○註 さて柳の葉をかゞみのは

こに入る、よしいかなるゆるともおもひえざれば、書によりて搜索しに、古き物にはあたらす、

俗談志^{卷四}註^略○に、伊豆權現は、豆州加茂郡に在、神木柳の木、凡三圍、高さ十丈ばかり、葉厚く、堅に筋

あり、此葉を所持すれば、災難を通るとて、守袋に納む、又女人鏡にまけば、則夫婦中むつまじきと

なり、

鏡立

〔歷世女裝考^一〕鏡臺

今の鏡。たて付の櫛箱は、三百年の以前よりありし物なり、又ひらくもた、むも自在なるかゞみ